幼稚園のお話

久門嘉祐

ライオンの赤ちゃん

或る山奥の岩穴にライオンが住んでゐました。其のライオンのうちに今年初めて赤ちゃんが生れました、お父さんライオンもお母さんライオンも喜びましたねー、それは〳〵大喜びをしました。そして可愛がつてゐました。或日お父さんライオンは朝早く起き支度をして坊やお父さんは向ふの山へ行つて何かよいおみやを持つて歸つてあげるよ、おとなしくしてゐらつしやいよハイチャ——おう〳〵ハイチャが出來る坊やは何といふおりこうであらう。ハイチャ〳〵〳〵とお父さんライオンはニコ〳〵お山へ行きました。あとで赤ちゃんライオンはおとなしく遊んでゐましたが、お十時になつたので大きな岩の蔭でお母さんのお乳をいただきました、すると赤ちゃんライオンはよい氣持になつてグウ〳〵寢つてしまひ一つよにお母さんライオンもうと〳〵と寢つてしまひました、少時してお母さんライオンが目を覺まして吃驚しました。いつのまにか赤ちゃんライオンがゐなくなつたのですもの、お母さんライオンはとび起きて坊や〳〵坊や〳〵と捜して歩きましたがもう家中どこにもゐません、お母さんライオンはワア〳〵泣きながら坊や〳〵と表の方へ捜しに出ました。丁度そこへお父さんライオンがおみやを手にぶらさげてニコ〳〵歸つて來ました。そして坊やがゐなくなつた吃度誰かがさらつて行つたにちがひな

いとお母さんライオンの泣々の話を聞いてお父さんライオンはもう腰を抜かさんばかりに驚きました。よしそれなら屹度向ふの山のものがさらつて行つたに違ひない、これから向ふの山へあばれ込んでどいつもこいつも殘らず喰ひ殺してやらうとそれは〳〵山も崩れるかと思ふやうな聲でどなつてゐます。そこへいつもライオンの小父に可愛がられて居る隣山の兎吉が山を越へて向ふの山の兎三郎の所へ行ふとして丁度山のふもとまで來たときにライオンの怒喝つて居る聲を聞きましたから吃驚して立ち止まり山をふと見ると兎吉のすきな〳〵ライオンの小父さんが火のやうに怒つて居るのを見ましたから、あら小父さんじや、これは大變と一生懸命ピョン〳〵はねて山を登りライオンの小父さんの側へ行きました。そして小父さんどうしたんですと聲をかけますと、ライオンは後を振り向きお、兎坊かまあ聞いてくれ、うちの坊やを向ふの山のものがさらつて行つたのじや、わしはこれから向の山へ行きどいつもこいつも喰ひ殺してやらふと思ふのじやと申しました。兎吉はこれをきいて、おやつ、可愛い坊つちやんをさらつて行くなんて惡いやつてございます。けれども小父さんまあそれは待つて下さい、小父さんが向ふの山へあばれこんでどいつもこいつも喰ひ殺すのはよいとしても若しも赤ちやんが怪我をしてはなりません、まあ〳〵待つて下さい。僕が行つて取戻して來ませう屹度です〳〵と兎吉は優しくライオンの小父さんの脊を撫でました。聞いてライオンの小父さんなる程兎坊の言ふとほりじやそれではお前に賴むどうぞ坊やを連れて戻つておくれ、小父さん一生のお願ひだからね、ては家へ歸つて待つて居るよとライオンはのそ〳〵お家へ歸りました。兎はよろしうございます、大丈夫です〳〵と兎吉はせい一ぱいの力を出してピョン〳〵

山を下り又山を上つて向ふの山へ行きつきました。ところが此の山の者はさつきライオンの小父さんが怒鳴つたのが聞えたと見えて皆内へ逃込んでしまひ戸をぴつしやりと締めて誰一人として外に出て居るものもなく何の音もさせず、ひつそりかんとして居ります。兎は此の樣子を見てこれは困つたな、まあ兎三郎さんの所へ行つて見ようと兎三郎の所へ行き戸をトン〳〵と叩きましたすると中てそーりあ來た大變〳〵と泣くやら大騒をしてゐます。兎吉はハハア、ライオンの小父さんが喰ひ殺しに來たと思つて居るのじやな、オイ兎三郎さん僕です〳〵兎吉です、どうぞこゝを明けて下さい相談があるんですと大きな聲で申しました、すると中てだめ〳〵ライオンがあんな兎吉のまねをしてうつかり明けると大變々々とどうしても戸をあけてくれません、兎吉は困つたなお猿さんの家へ行つて見ようとつぶやきながら、お猿の所へ行きトン〳〵〳〵戸を叩きました。すると中てそーら來たと皆角つこに小さくなつて物一つ言ふものはありません。兎吉はだめだ熊小父さんの家へ行つてトントン戸を叩き熊の小父さん僕です〳〵隣山の兎吉ですどうぞこゝをあけて下さいお小父さんに少し相談があるんですとせい一つぱい大きな聲で言ひましたがぶつつりとも返事をしてくれません。ほんとうに困つたどうしたらよからうと兎吉は首をかしげて少時考へました。おゝそうじや僕の好きな謠を謠ふそうじやそふすれば皆いつものやうに見にくるかも知れぬと廣場へ出て思ひ切りよい聲で謠ひ面白そうに踊りまわりました。すると今まで戸をしめて内でこわがつてゐた兎三郎も狸も狐も熊も鹿も猿も駱駝もがら〳〵と戸をあけて皆言ひ合したやうに廣場へ集まつて來ました。そして手を叩いて喜んでゐます。そこで兎吉が一段と聲をはりあげて皆さんの内でライオンの

坊つちやんをさらつて來て居るものがあればすぐに玆へ出して下さい僕が連れて歸つてライオンの小父さんにはよくあやまつて上げます早く出して下さい、ぐず〳〵して居るとライオンの小父さんがこゝへあばれ込んで來て皆を喰ひ殺してしまふとまあ〳〵大層怒つてゐますと言ひました。皆は又こわくなつてぶる〳〵振へながら僕じやない私ではないと言ふて誰一人として私じやといふものはありません。そこで兎吉は皆の顏を順に見廻はして困つたな、なる程此の中にはないようじや困つたな〳〵とがつかりしてゐます。すると友達の兎三郎さんは誰かがさらつて來て居るものが屹度あるんだらうにとずゝと皆の顏を見廻はしました、そして、しめたといふやうな顏をして虎のお父さんがゐないよと申しました。すると側にゐた狐があゝ虎の小父さんは今しがたのそ〳〵歸つてあゝお腹がいたい〳〵と言つて寢てゐたがもうぐう〳〵寢つてしまつて居るよと言ひました。すると皆が虎の小父さん〳〵と總立になりました。そこで兎吉は、まあ〳〵皆さん待つて下さい、うかつなことをして虎の小父さんにあばれられたらこれも大變です、これは私にまかして下さいまあ〳〵皆坐つて下さい。と皆を靜め兎三郎をつれて二人で虎の家へ行き二人掛りで力一ぱい出して戸をあけました。そして中の樣子を見ますと虎は大いびきをかいて寢つて居りますから二人は足音のせぬ樣に內にはいりました。そして兎吉は持つて行つた藁すべで虎の小父さんの鼻の孔をクス〳〵くすぐりました。すると虎の小父さんは、クション〳〵〳〵と大きなくしやみを三つしました。其拍子にライオンの赤ちやんがひよこり飛び出しました。そこで兎三郎が急いでライオンの赤ちやんを抱いて廣場へ急いで戻りました。兎吉はそつと表へ出て戸を前の通りにしめて廣場へ戻りまし

た。そこて皆さんライオンの赤ちゃんを連れて戻りました。早速私がお連れしてライオンの小父さんにお渡しよくあやまつておきますもう大丈夫ですと申しました。皆も大層喜びましたお蔭てまあ命は助かつたと兎吉に山程お禮を言ひました。兎吉は皆と別れて一生懸命にピョン〳〵はねてライオンの小父さんのお家へ戻りました。ライオンの小父さんと小母さんは只々心配そうに兎吉の戻るのを待つて居りました。小父さん今戻りました赤ちゃん連れて戻りましたとライオン赤ちゃんを小母さんに渡しました。二人は喜びましたよ。それは〳〵てんてこまひして喜び涙をハラ〳〵流して兎坊ありがたう〳〵と百も千もお禮を言ひました。このことをお月様が大空て見てゐらして、あゝ兎坊はよい子じや〳〵と早速雲をお使にしてお迎によこしました。兎吉も大喜びて雲にのりピョン〳〵はねて雲の中を空へ空へとはねて上りお月様に行きまして、そしてお月様の御殿ていつまても〳〵仕合にくらすやうになりましたとさ。

天狗の團扇

岡崎市熱岡幼稚園　安間公觀

或るところに、健ちやんといふ――それは〳〵元氣の好い子供がありました。

天氣の好い日に、たつたひとりで裏の山へ遊びにまゐりました。――それは丁度秋のことでしたから、山には栗や松茸やしめぢが澤山ありました。

健ちやんはさすが山の近くに住んてゐる子供だけあつて松茸やしめぢなどを見付けることが大變上手です。

「おや！こんなところに、また松茸があつたぞ。……や！や！しめぢもあるぞ、」